

# 『三國志演義』における身長は如何に解釋されるべきか

— 中國歴史敘述における身長表現に關する考察・序説 —

竹内眞彦

## 一、問題意識の所在

『三國志演義』冒頭、その主人公とも言うべき劉備が、初めて物語に登場する際、以下のような描寫が現れる。<sup>1)</sup>

那人平生不甚樂讀書、喜犬馬、愛音樂・美衣服。少言語、禮下於人、喜怒不形於色。好交遊天下豪傑、素有大志。生得身長七尺五寸、兩耳垂肩、雙手過膝、目能自顧其耳、面如冠玉、唇若塗朱。中山靖王劉勝之後、漢景帝閣下玄孫。姓劉、名備、表字玄德。

(この人、平生より學問はあまり好まず、鬪犬や乘馬を好み、音樂やきらびやかな衣服を愛でていた。寡黙でよく人にへりくだり、喜怒の情を表に出すことはない。天下の豪傑と交遊することを喜び、平素より大志を抱いている。その身長は七尺五寸、兩耳は肩まで垂れ、兩手を垂らすと膝頭を超えるまでに長く、眼は自分の耳を振り返ることができた。面は冠の玉のように白く、唇は朱を塗ったよう。中山靖王劉勝の後裔にして、漢の景帝閣下の玄孫に當たる。姓は劉、名は備、字を玄德という。)

直接の原據であるかはさておき、この描寫の源が正史『三國志』に

あることは疑いない。『三國志』蜀書・先主傳に云う。

先主不甚樂讀書、喜狗馬・音樂・美衣服。身長七尺五寸、垂手下膝、顧自見其耳。少語言、善下人、喜怒不形於色。好交結豪俠、年少爭附之。(先主 甚だしくは讀書を樂しまず、狗馬・音樂・美衣服を喜ぶ。身長は七尺五寸、手を垂らさば膝を下り、顧れば自ら其の耳を見る。語言少なく、善く人に下り、喜怒は色に形はれず。豪俠と交結するを好み、年少 争ひて之に附く。)

ただ、ここに現れる「七尺五寸」という身長については一考の餘地がある。この「七尺五寸」は、無論、長身を記すことを意圖しており、古來、聖天子・名君・勇將・文人など様々な人物(つまり正史に立傳されるような人物、本稿ではやや強引なのを承知で「英雄」と總稱する)について、長身(あるいは短軀)の形象が與えられること自體は枚擧に暇がない。古くは『史記』項羽本紀が、項羽の身長を「八尺餘」と記し、『初學記』はその卷十九・人部下に「長人第四」なる目を立て、長身の人物の記録を蒐集している。その中では、例えば、「禹長九尺九寸、殷湯長九尺」あるいは「季歷之妃生文王昌、身長十尺」などと云う。このような「長身」という記號が如何なる意味を持

つかはひとまず措くが、正史『三國志』あるいは『三國志演義』に現れる劉備の身長も、そうした「英雄」に附される記號の一環と言えよう。

問題は、この「七尺五寸」が、正史『三國志』が成書した西晋代と、『演義』の成立した明代において、異なる長さを表すということにある。周知のごとく、中國における一尺は、時代・地域によってその長さを變えてゆくのである。(表1参照)。

地域差については措く。本稿で問題にしたいのは時代による差である。表1に示した通り、一尺の長さは、時代を下るに連れ、徐々に長くなる傾向にある。ただ、南北朝期、就中、北朝においてのみ、「徐々に」ではなく、劇的な伸長を示す。西晋期の一尺は、メートル法で言えば、二十四糎<sup>センチメートル</sup>前後であったが、わずか三百年後の隋朝に至って、三十二糎前後、すなわち一・三倍を越えるのである。以降、多少の變動はあれ、一尺はこの三十二糎前後という長さで認識されている(ただし、例外がある。後述)。

さて、繰り返すが、正史『三國志』は西晋初期に編纂され、『三國志演義』は遅くとも明代中期、すなわち十六世紀前半には一應の完成を見ている。となれば、正史に現れる劉備の身長と、『演義』に現れるそれとは、同じ「七尺五寸」でありながら、相當に異なる長さとして讀者に認識される可能性がある。

つまり、『演義』の成書した明代(あるいはそれに連なる清代)の讀者が、古代の一尺が自分たちのそれよりも短いという前提を持っていたならば、劉備の身長を(精確に當時の長さに還元することはできないであろうが)百八十糎前後、すなわち、無論、長身ではあるが、人間の身長として當然有り得るものとして捉えることになる。一方、

『三國志演義』における身長は如何に解釋されるべきか

表1 現存する尺による歴代の一尺の長さ

No	代	長(cm)	出土地	六尺	七尺	七尺五寸	八尺	九尺	備考
1	殷	15.78	傳河南安陽	94.68	110.46	118.35	126.24	142.02	
3	戰國	23.1	傳河南洛陽	138.60	161.70	173.25	184.80	207.90	
4	前漢	23	廣西貴縣	138.00	161.00	172.50	184.00	207.00	
7	前漢	23.6	甘肅金塔	141.60	165.20	177.00	188.80	212.40	
9	新	22.92	甘肅定西	137.52	160.44	171.90	183.36	206.28	銅丈
12	後漢	23.46	湖南長沙	140.76	164.22	175.95	187.68	211.14	
21	後漢	22.95	寧夏固原	137.70	160.65	172.13	183.60	206.55	
22	後漢	23.75	安徽合肥	142.50	166.25	178.13	190.00	213.75	
29	三國	23.8	甘肅嘉峪	142.80	166.60	178.50	190.40	214.20	
31	三國	24.2	江西南昌	145.20	169.40	181.50	193.60	217.80	
33	西晋	24.15	北京	144.90	169.05	181.13	193.20	217.35	
36	西晋	24.5	江西南昌	147.00	171.50	183.75	196.00	220.50	
37	後涼	24.2	甘肅敦煌	145.20	169.40	181.50	193.60	217.80	
40	南朝	25	歷史博物館藏	150.00	175.00	187.50	200.00	225.00	
42	北魏	30.9	歷史博物館藏	185.40	216.30	231.75	247.20	278.10	
43	隋	29.67	故宮博物院藏	178.02	207.69	222.53	237.36	267.03	
45	唐	30.23	上海博物館藏	181.38	211.61	226.73	241.84	272.07	
55	唐	31.2	湖北武漢	187.20	218.40	234.00	249.60	280.80	
56	北宋	31.4	南京孝陵	188.40	219.80	235.50	251.20	282.60	
58	北宋	30.8	湖北江陵	184.80	215.60	231.00	246.40	277.20	
63	南宋	28.3	福建福州	169.80	198.10	212.25	226.40	254.70	
65	明	31.78	山東梁山	190.68	222.46	238.35	254.24	286.02	營造尺
66	明	32	故宮博物院藏	192.00	224.00	240.00	256.00	288.00	營造尺
67	明	34.5	上海博物館藏	207.00	241.50	258.75	276.00	310.50	裁衣尺
71	清	32	故宮博物院藏	192.00	224.00	240.00	256.00	288.00	營造尺
74	清	35.26	歷史博物館藏	211.56	246.82	264.45	282.08	317.34	裁衣尺
76	清	34.18	故宮博物院藏	205.08	239.26	256.35	273.44	307.62	量地尺

註『中國古代度量衡圖集』(文物出版社、1981年)に據る。表中の番號なども同書のものに従う。

その前提に缺けていたならば、自分たちの尺度で考える他はなく、劉備の身長は、二百四十糎という、おそらく、自分たちの日常には有り得ないような巨人として認識されざるを得ない。

果たして、どちらであったのであろうか。

## 二、「演義」における身長表現

まず、前節での問題意識について、意味づけを行う必要がある。つまり、『三國志演義』という作品にとって、身長表現を検討することがいかなる価値を持ち得るかを確認しておきたい。例えば、『演義』に現れる身長表現が劉備ひとりに限られるのであれば、検討する価値は低いということになるからである。

『演義』嘉靖本において、身長についての具體的記述（數値を伴った記述）について纏めたものが表2である。比較の都合上、正史『三國志』の身長表現と『演義』に先行する『三國志平話』についても示した（電子テキストなどを用いた筆者の計數に據る。以下同）。『演義』嘉靖本において、身長表現を附された人物は三十五名を數える。劉備や關羽など、複数回身長を記述される者もいるので、身長表現自體は、三十五よりも若干多い。劉備・諸葛亮など正史に身長表現の濫觴を持つ者も多いが、關羽・張飛・呂布のように正史には記載がなく、平話の如き、民間傳承に近いものに濫觴を求めべき例もある。無論、『演義』自身の創作も幾何かは含まれているであろう。なお、劉備の「七尺五寸」は長身だからこそ記載されるのだが、『演義』全體では、「八尺」「九尺」といった人物が頻出し、劉備自身は、身長を記載される中では、むしろ低い部類として印象づけられることは指摘しておきたい。

さて、『演義』に現れる、この身長表現の數を多とすべきだろうか。それを確認するには、『演義』以外の章回小説に現れる身長表現を計數するのが最も近道だと思われる。『三國志演義』と同等の紙幅を持ち、かつ成立年代にそれほど差がないテキストとして、まず擧げるべきは『水滸傳』であろう。その百二十回文繁本では、四十一名四十四例の身長表現を確認できる。また、『金瓶梅詞話』（全百回）が八名十例、『西遊記』（全百回）が七名七例、『封神演義』（全百回）が十五名十六例、『說唐』（全六十六回）が十名十例、『殘唐五代史演義傳』が十一名十六例、『醒世姻緣傳』（全百回）が七名七例を検出できた。

統計的な精度を上げるためには、對象テキストを増やした上で更に精緻な調査が必要であろうが、おおよその傾向については確認できよう。すなわち、『三國志演義』と『水滸傳』が突出して多く、『封神演義』『說唐』『殘唐五代史演義傳』がこれに次ぐ。『三國志演義』『水滸傳』を筆頭とする歴史故事に材を採る章回小説に多く身長表現が現れるということは言えそうである。つまり、身長表現は歴史故事（すなわち讀者にとって同時代の出來事ではない）を描出する装置として機能している可能性を指摘できる。

附言すれば、單純に數の上で言えば、『水滸傳』が『三國志演義』を上回るのであるが、その重要性という点では兩者は大差ないと言つてよい。表2に示した如く、『演義』では劉備・關羽・張飛に始まって、曹操・董卓・呂布から諸葛亮に至るまで、主要人物の多くに身長表現が附され、『水滸傳』も、魯智深・林冲・楊志・宋江・武松といった主要人物に身長表現が附されるからである。ただし、その出現の仕方は異なる。

表2 三國志故事における身長表現

	姓名	正史(含裴注)	平話	嘉靖本
1	劉備	七尺五寸	七尺五寸	七尺五寸
2	張飛	×	九尺餘	八尺
3	關羽	×	九尺二寸	九尺三寸
				九尺五寸
4	曹操	×	×	七尺
5	呂布	×	九尺二寸	一丈
			一丈	
6	董卓	×	八尺五寸	八尺
7	華雄	×	×	九尺三寸
8	孫堅	×	×	八尺
9	劉表	八尺餘	×	八尺有餘
10	趙雲	八尺	×	八尺
11	程昱	八尺三寸	※	八尺三寸
12	太史慈	七尺七寸	※	七尺五寸
13	何曼	×	※	九尺五寸
14	許褚	八尺餘	×	八尺
15	陳武	七尺七寸	※	七尺
16	董襲	八尺	※	八尺
17	文醜	×	×	八尺
18	于吉	×	※	八尺
19	諸葛亮	八尺	九尺二寸	八尺
20	凌統	×	×	八尺
21	魏延	×	一丈?	九尺
22	文聘	×	※	八尺
23	馬騰	八尺餘	×	八尺餘
24	龐德	×	×	八尺餘
25	張松	×	五尺五寸	不滿五尺
26	彭萊	八尺	※	八尺
27	陸遜	×	×	八尺
28	顎煥	※	※	九尺
29	兀突骨	※	※	丈二
30	越吉	※	※	一丈
31	郝昭	×	※	九尺
32	王雙	×	※	九尺
33	諸葛恪	七尺六寸	※	七尺六寸
34	文鸯	×	※	八尺
35	鄧艾	×	×	七尺

【参考】正史にのみ身長表現の現れる人物

姓名	正史	平話	嘉靖本
王裒	八尺四寸	※	※
管寧	八尺	※	※
何夔	八尺三寸	※	※
何熙	八尺五寸	※	※
司馬儁	八尺三寸	※	※
滿寵	八尺	※	×
譙周	八尺	※	×
孫邵	八尺	※	※
陳化	七尺九寸	※	※
孫韶	八尺	※	×
朱然	不盈七尺	※	×

【凡例】

- × = テキストに姓名のみ登場(身長表現なし)
- ※ = テキストに未登場

『三國志演義』における身長は如何に解釋されるべきか

身長表現というものは、他の身體表現と同じく、それが附された人物を紹介し、その形象をある程度決定づける役割を擔う。ということ、長篇の章回小説においては、その人物が初めて登場する際に附されるのが通例となる。一方、周知の如く、『水滸傳』前半部が梁山泊百八人の好漢たちの銘々傳という形式を採る以上、前述の人物たちは一齊に登場するわけではない。結果、その身長表現も一箇所に集中して現れるのではなく、かなりの間隔を置いて出現する。例えば、魯智深は第三回、林冲は第七回、楊志は第十二回、宋江は第十八回、武松は第二十四回というように、武松を除けば、いずれもその人物の初登場時に身長表現が附されるのである。

これに對し、『演義』の身長表現はその物語冒頭に集中して現れる。嘉靖本卷一の第一則・第二則（百二十回本の第一回到相當）で劉備・關羽・張飛・曹操の身長を記述するのに始まり、卷一（百二十回本の冒頭五回到相當）においては、この四名に加え、董卓・呂布・孫堅・華雄について身長が記される。つまり、物語冒頭において、身長表現が頻出してゐる。

つまり、兩者は身長表現の用法が異なるのであり、それぞれの用法が、文藝表現としてどのような意味を持ち得るかは検討すべき問題である。しかし、この問題の詳細は後考に譲ることとし、本稿では『演義』が身長表現を意圖的に用いてゐると思われる箇所を指摘するにとどめる。

嘉靖本卷一第九則「曹操起兵伐董卓」において、十八鎮の諸侯が曹操の檄に應じて董卓打倒の兵を擧げる。先鋒となつたのは、長沙太守孫堅であった。これに對し、董卓は華雄を出陣させる。孫堅は華雄との緒戦に勝利するが、味方の裏切りによって兵糧を斷たれ、それを知つ

た華雄の夜襲に惨敗し、宿將の祖茂をも失う。勢いに乘じた華雄は諸侯の本陣に迫り、恐慌を來した本陣において、華雄撃退に名乗りを擧げたのが劉備の義弟關羽であった。關羽は出陣に際し酒を勧める曹操にその杯を預け、戰場へ出る。一刀のもとに華雄を斬つた關羽が歸陣した時、用意された酒はなお温かかったと言う。

右記は『演義』の名場面としてよく知られたものであるが、この挿話において、孫堅の身長は八尺、華雄の身長は九尺、關羽の身長は九尺五寸と設定される。そして、孫堅は華雄に敗れ、その華雄を關羽が斬る。つまり、身長の高低がそのまま各自の「武」の優劣を反映しているのである。附言すれば、關羽はともかく、孫堅・華雄については、『平話』に登場しながら身長表現は附されず、この二人の身長については、『演義』の創作である可能性が高い。すなわち、少なくともこの挿話においては、『演義』が意圖的に身長表現を用いてゐる可能性を指摘できるのである。

このように見てくれば、『演義』の身長表現における「尺」が如何なる長さで解釋されていたかは、『三國志演義』というテキストがどのように讀まれていたかを理解する上で、検討すべき價値のある問題であると言えよう。

### 三、「尺」の變動に對する認識

本節以降では、具體的に、第一節で掲げた命題を検討したい。

第一節で述べた如く、正史『三國志』の時代と『三國志演義』の成立年代（遅くとも明代中葉）では、一尺の長さが異なる。ならば、『演義』讀者が『演義』の身長表現は正史に濫觴があること、そして正史『三國志』成立當時と（『演義』讀者にとっての）現代とでは一

尺の長さが異なり、自分たちの用いている長さより相當短いことを知っていたら、『演義』に現れる身長を正史『三國志』の基準に合わせて理解することが可能であろう。

だが、その可能性は極めて低い。

一尺の伸長が劇的に始まった南北朝期は、一種の戦亂時代であったゆえか、伸長した長さを舊來に正す、あるいはそれを正式のものとして扱おうとする動きは表面化しない。權力が、この「一尺」の伸長した事實を認め、それについて何らかの規範化を圖るのは唐代を待たねばならない。

『唐六典』卷三「尚書戸部」金部郎中・員外郎の條に云う（傍點筆者、以下同）。

凡度以北方秬黍中者、一黍之廣爲分、十分爲寸、十寸爲尺、一尺二寸爲大尺、十尺爲丈。……凡積秬黍爲度量權衡者、調鍾律、測晷景、合湯藥及冠冕之制則用之。内外官司悉用大者。（凡そ度は北方の秬黍の中なる者を以てし、一黍の廣を分と爲し、十分を寸と爲し、十寸を尺と爲し、一尺二寸を大尺と爲し、十尺を丈と爲す。……凡そ秬黍を積みて度量權衡を爲すは、鍾律を調べ、晷景を測り、湯藥を合すこと及び冠冕の制は則ち之を用ふ。内外の官司 悉く大なる者を用ふ。）

この法令は、形式的には漢代の制に復すよう謳っている。『漢書』律曆志に次のような記述がある。

度者、分・寸・尺・丈・引也、所以度長短也。本起黃鐘之長。以子穀秬黍中者、一黍之廣、度之九十分、黃鐘之長。一爲一分、十分爲寸、十寸爲尺、十尺爲丈、十丈爲引。（度は、分・寸・尺・丈・引なり、所以は長短を度るなり。本と黃鐘の長さより起く。）

『三國志演義』における身長は如何に解釋されるべきか

子穀秬黍の中なる者を以て、一黍の廣さ、之を度すること九十分、黃鐘の長さなり。一を一分と爲し、十分を寸と爲し、十寸を尺と爲し、十尺を丈と爲し、十丈を引と爲す。）

秬黍（黍の一種）の實は橢圓形であるが、その短徑（廣）を一分とする點で兩者は一致する。ならば、一尺の長さも一致するはずであるが、事情はそう簡單ではない。『唐六典』には「一尺二寸を大尺と爲し」という句があるからである。つまり、『唐六典』は、十寸を一尺とする（假に小尺と呼ぶ）と同時に、十二寸を「大尺」と規定している。しかも、鍾律の調整（調鍾律）、天文の觀測（測晷景、嚴密には太陽によってできる影の觀測）、藥の調合（合湯藥）及び冠冕についての規定（冠冕之制）以外では、「悉く大なる者を用ふ」というのであるから、原則的には大尺こそが、通常用いられる「一尺」ということになる。つまり、『唐六典』は、形式的には漢代への復古を主張するのだが、實質的には現狀を追認し、一尺の伸長を規定のものとし、それを規範化しているのである（但し、この規定が嚴密に用いられたならば、大尺は小尺の一・二倍ということになり、小尺が二十一〜二十四糶と假定すると、大尺は二十六糶強〜二十九糶弱となるべきである。しかし、前掲したように出土した唐代の尺は三十〜三十二糶のものがほとんどであり、『唐六典』の規定が嚴密に運用されたかは疑問が残る）。

さて、原則的には大尺を用いることになったとは言え、ほぼ漢代の一尺に相當する小尺も、限定された場では残ることになった。そして、少なくとも天文觀測においては、明代まで小尺が用いられていたようである。例えば、南京紫金山天文臺の藏する明代の銅景表尺は、刻まれた目盛から一尺を約二十四・五糶として作られていることが判明し

ている。

しかし、小尺については、限られた人物が「知識」として保存していたものと考えるのが妥當であろう。唐代以降、日常生活で身長を表す場合、小尺を用いていたとは思われない。

そのことを證明する断片的な資料を挙げる。

春秋時代、齊の宰相を務めた晏嬰は短軀として知られる。それを踏まえ、例えば南宋の陸游「北窓」(七言古詩全十六句、『劍南詩稿』卷八十二)の冒頭二句に云う。

晏嬰長不滿五尺 晏嬰 長五尺に満たず

淳于飲能至一石 淳于 飲むこと能く一石に至る

ここで晏嬰のことを「長不滿五尺」と詠う。また、北宋の黃庭堅や晁説之に晏嬰を「不滿三尺」「三尺」と表現する例がある。ところが、晏嬰の身長は、古來、「不滿六尺」と記されるのが通例なのである。『晏子春秋』内篇雜上第五に云う。

晏子爲齊相。出、其御之妻從門閒而闚。……既而歸、其妻請去。

夫問其故。妻曰、晏子長不滿六尺、相齊國、名顯諸侯。(晏子

齊に相たり。出づるとき、其の御の妻 門閒より闚ふ。……既に

して歸るに、其の妻 去るを請ふ。夫 其の故を問ふ。妻 曰く、

晏子 長 六尺に満たざるも、齊國に相し、名は諸侯に顯る。)

この挿話は、『史記』管晏列傳にも引かれ、廣く知られたものであろう。黃庭堅や晁説之の同時代人である蘇軾も、『晏子春秋』に倣い、晏嬰の身長を「不滿六尺」と表現している。

にもかかわらず、陸游はこの典故に則らない。これは、「不滿六尺」が、春秋時代はともかく、宋代では決して短軀を意味していないことに起因しているよう。晏嬰の短軀を表現する際、典故を用いると短

軀にならないという矛盾が生じるのである。そこで、宋代において短軀の表現となる、「不滿五尺」「不滿三尺」といった表現を用いるのだと考えられる。當然、古代の一尺が、現代(ここでは宋代)のそれに比して短い、という知識を持っていなければならない(これは蘇軾も同様である)。しかし、ここで注目すべきは、典故を無視せねばならぬほど、時代によって「六尺」の印象が異なる点である。さらに言えば、少なくとも宋代においては、身長を表現する際、疑いなく大尺が用いられていることも意味する。

#### 四、正史における身長表現

そして、身長表現に大尺を用いることは宋代に始まるのではなく、大尺が規範化された唐代において、すでに始まっていたと思しい。二十四史(所謂「正史」)に現れる身長表現が、その事實を強く示唆する。

表3に正史に現れる身長表現の出現數及び出現頻度を纏めた。絕對數は、當然のことながらそれぞれの正史の紙幅に左右されるので、出現頻度に注目したい。さらに、小尺と大尺の交代を端的に示す指標として、六尺から七尺、及び七尺一寸から八尺九寸まで身長が、どのような頻度で現れるかをグラフ化したものが表4である。

まず、表3についてであるが、多少のばらつきは見られるものの、『三國志』から『隋書』『北史』に至る、つまり魏晉南北朝を扱う史書において最も高い出現頻度を示す。これは、後漢末から人物評が盛んになったこと、そしてその一環として體格の良、就中、長身の人物について肯定的な評價を與えたこと、及びこの時代を扱う正史には非漢民族が多く記録されていることを要因として挙げられよう。後者に

表3 二十四史における身長表現の分布

	本文	注文	総頁数	出現頻度(1)	出現頻度(2)	出現頻度(3)	出現頻度(4)	5.0	6.0	6.1-6.9	7.0	7.1-7.9	8.0	8.1-8.9	9.0	総計	身長	身長
『史記』	13	8	2364	0.550	0.550	0.254	0.127	2	2	0	1	0	5	1	2	13	0	0
『漢書』	16		2851	0.561	0.561	0.456	0.035	1	1	0	0	2	7	4	1	16	0	0
『後漢書』	20	4	2998	0.667	0.667	0.534	0.033	0	0	0	1	4	6	6	3	20	0	0
『三國志』	17	7	1510	1.126	1.126	1.060	0.066	0	0	0	1	5	9	2	0	17	0	0
『晉書』	42		2546	1.650	1.650	1.493	0.118	0	1	0	2	12	12	14	1	42	0	0
『宋書』	16		1405	1.139	1.139	0.641	0.071	0	0	1	0	7	2	0	0	10	0	0
『南齊書』	3		763	0.393	0.393	0.393	0.000	0	0	0	0	2	0	1	0	3	0	0
『梁書』	17		867	1.961	1.961	1.730	0.231	0	1	0	1	7	8	0	1	18	0	0
『陳書』	4		499	0.802	0.802	0.802	0.000	0	0	0	0	3	0	1	0	4	0	0
『南史』	41		2027	2.023	2.023	1.628	0.395	0	3	1	4	21	11	1	0	41	0	0
『魏書』	34		2329	1.460	1.460	1.374	0.000	0	0	0	0	7	21	4	2	34	0	0
『北齊書』	9		698	1.289	1.289	0.860	0.287	0	0	0	2	0	6	0	1	9	0	0
『周書』	10		930	1.075	1.075	0.968	0.000	1	0	0	0	1	5	3	0	10	0	0
『隋書』	8		901	0.888	0.888	0.777	0.000	0	0	0	0	1	6	0	1	8	0	0
『北史』	51		3351	1.522	1.522	1.373	0.030	1	0	0	1	9	31	6	3	51	0	0
『舊唐書』	19		4052	0.469	0.469	0.049	0.420	0	7	3	7	0	2	0	0	19	0	0
『新唐書』	25		3309	0.756	0.756	0.060	0.695	0	3	4	16	0	2	0	0	25	0	0
『舊五代史』	9		1846	0.488	0.542	0.054	0.379	0	0	0	7	0	1	0	1	9	0	1
『新五代史』	6		923	0.650	0.650	0.108	0.542	0	0	0	5	0	1	0	0	6	0	0
『宋史』	24		6596	0.364	0.394	0.045	0.318	0	5	1	15	0	3	0	1	25	2	0
『遼史』	2		695	0.288	0.288	0.144	0.000	0	0	0	0	0	1	0	1	2	0	0
『金史』	1		1811	0.055	0.552	0.000	0.055	0	0	0	1	0	0	0	0	1	6	3
『元史』	9		2791	0.322	0.466	0.179	0.143	0	0	0	4	0	5	0	0	9	4	0
『明史』	10		5462	0.183	0.531	0.110	0.073	0	0	0	4	0	5	1	0	10	17	2

註①総頁数は、いずれも中華書局排印本に據る。ただし、「書」「志」「表」については計數對象としていない。  
 ②出現頻度は、いずれも上記中華書局排印本百頁あたりにおけるもの。  
 ③出現頻度(1)は數値を含む身長表現のみ、出現頻度(2)は(1)に「身長(大)」「長身」を加えたもの。  
 ④出現頻度(3)は七尺一寸から八尺九寸までの、出現頻度(4)は六尺から七尺までの身長表現の頻度を示す。

『三國志演義』における身長は如何に解釋されるべきか

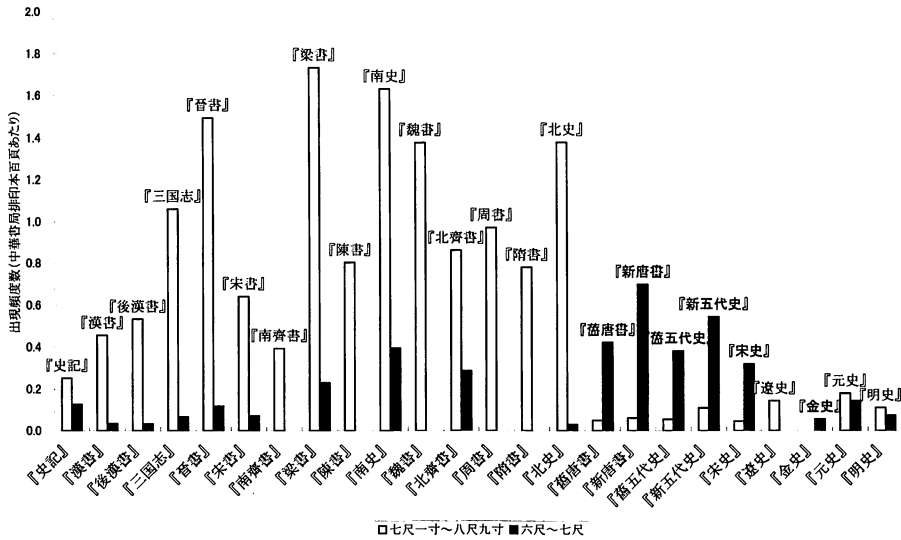
ついで附言するならば、例えば、單獨の王朝を扱った正史として、身長表現の用例が最も多いのは『晉書』であるが、筆者が確認し得た四十二例中、非漢民族のものが實に二十六を占める(一例を除き、『晉書』載記に現れる)。これは、多くは北方・西方の出身である彼らが漢民族に比して總じて長身であったことを示唆するとともに、逆に、長身であることが非漢民族を表す記號となっている可能性をも指摘できよう(そこには無論、プロバガンダとしての身長表現も多く現れることになる)。

また、人物評の一環としての長身の稱揚(及びそれに伴う身長記録)について言えば、この傾向は唐代には繼承されなかったと思しい。周知のごとく、唐代の吏部詮試の基準として、「身」「言」「書」「判」の四科があり、「身」すなわち容貌はその筆頭に擧げられている。ならば、唐代の文に身長記録が多く残っていると豫想されるが、實態は異なる。例えば、『全唐文』を筆者が閲した限り、身長表現は二十七例を検索できるに過ぎず、しかも、その中八例は僧侶や道士についてであり、黃帝や武則天など現實の記録とは思ひ難いもの、鄭玄や諸葛亮、陳武帝など前代の人物に関する言及も含まれる。すなわち身長表現、少なくとも具體的な數字を伴うそれを用いられることは多くはなく、しかも、その用いられる場に偏りがある。

やや逸脱が過ぎたかも知れない。さて、表4が示す全體の傾向は、『舊唐書』以降、すなわち大尺が採用された後、七尺一寸より大なるをもつて身長を表現することが激減する點、それに代わり、六尺から七尺をもつて身長を表現する例が相對的に増えるという二點で纏めることが可能であろう。特に「六尺」の意味するものが、『北史』以前と『舊唐書』以後では異なる點は強調しておきたい。



表4 正史における身長表現（六尺～八尺九寸）の出現頻度



初、張蒼父長不滿五尺、及生蒼、蒼長八尺餘、爲侯・丞相。蒼子復長。及孫類、長六尺餘、坐法失侯。（初め、張蒼の父は長五尺に満たず、蒼を生むに及び、蒼の長は八尺餘にして、侯・丞相と爲る。蒼の子 復た長たり。孫の類に及び、長は六尺餘、法に坐して侯を失ふ。）（『史記』張丞相列傳）

劉伶字伯倫、沛國人也。身長六尺、容貌甚陋。（劉伶 字は伯倫、沛國の人なり。身長六尺、容貌甚だ陋たり。）（『晉書』劉伶傳）

子儀長六尺餘、體貌秀傑。（郭）子儀の長は六尺餘、體貌秀傑たり。）（『舊唐書』郭子儀傳）

趙師旦字潛叔、樞密副使積之從子。美容儀、身長六尺。（趙師旦 字は潛叔、樞密副使積の從子なり。美容儀にして、身長六尺。）（『宋史』忠義傳・曹觀傳附趙師旦傳）

同じく「六尺」という表現を用いていても、劉伶については「容貌甚陋」と云う一方で、郭子儀については「體貌秀傑」、趙師旦については「美容儀」と云う。第一例の張蒼一族では、「不滿五尺」という短軀であった張蒼の父から、八尺を越える張蒼が生まれ、その長身に呼應するように、張蒼は侯・丞相にまで登る。しかし、孫の張類は「六尺餘」に過ぎず、その短軀ゆえか、罪に連坐して爵位を失ったというのである。前二者の「六尺」は短軀を示すのに對し、後二者の「六尺」が長身を表すのは明白であろう。

以上から、正史においては、『舊唐書』以降、身長を表現するのに大尺を用いていたと結論づけられる。

ただし、『舊唐書』以降とは言っても、長身の表現として「六尺」を用いるのは、『舊唐書』『新唐書』『宋史』の三書のみである。新舊

五代史、及び『遼史』『金史』『元史』『明史』では身長表現として「六尺」が用いられる例はない。しかし、この現象は、これらの史書において身長を表現するのに大尺が用いられたことを否定するものではなく、身長表現が従来ものから質的に變化していることに原因を求められよう。

表3に示したが、『史記』から『新唐書』までは、「八尺五寸」（韓王信、『史記』韓信盧縮列傳）、「七尺三寸」（後漢光武帝、『後漢書』光武帝紀）、「六尺七寸」（臧質、『南史』臧質傳附臧質傳）の如く、しばしば端數を含む形で身長が表現される。これは、往々にして傳説的なものを含むとは言え、特に同時代人の身長については、かなりの具體性をもって記録していたことを示唆する。

一方、『舊五代史』以降は、「六尺」「七尺」「八尺」というような形がほとんどであり、端數を含む身長表現は極めて少ない。つまり、これらにおける身長表現は、それ以前のものとは比べやや具體性を缺き、多分に觀念的なものになっている可能性が指摘できる。

さらに、「六尺」について附言しておく。正史という場を離れれば、『遼史』以降の年代においても、「六尺」を長身とする例が散見できる。例えば、明の宋濂が著した「故江南等處行省都事追封丹陽縣男孫君墓銘」（『明文衡』卷八十三所收）に云う。

君諱炎、字伯融、姓孫氏。金陵句容人。曾祖某、祖文嗣、父顯卿、皆爲儒。母洪氏。君身長六尺餘、面黑如鐵、一足偏跛。（君諱は炎、字は伯融、姓は孫氏。金陵句容の人なり。曾祖某、祖文嗣、父は文嗣、父は顯卿、皆な儒たり。母は洪氏。君 身長六尺餘、面の黒きこと鐵の如く、一足偏跛たり。）

また、元代の高麗で成書した漢語教科書『朴通事』卷下にも、「六

『三國志演義』における身長は如何に解釋されるべきか

尺」をもって堂々たる體軀とする表現が見える。元明代においても、「六尺」は長身なのである。

にもかかわらず、『遼史』『金史』『元史』『明史』などで、「六尺」が現れないのは、これが古代において長身ではないことを、編纂者たちが自覺してしまったゆえ、用いることを避けたのではあるまいか。これは正史を編纂するという、宿命的に前代と現在を比較せざるを得ない場特有の現象であった可能性がある。そして、「六尺」という數字に代わるようにして、「長身」「身長」という、さらに具體性を缺いた表現が頻出するようになる。

宗永、本名挑撻、幹賽子。長身美髯、忠確勇毅。（宗永、本の名は挑撻、幹賽の子なり。長身美髯にして、忠確勇毅なり。）

（『金史』始祖以下諸子傳・世祖子幹賽傳附宗永傳）

紐璘偉貌長身、勇力絶人、且多謀略、常從父軍中。（紐璘は偉貌長身にして、勇力絶人、且つ謀略多く、常に父の軍中に從う。）

（『元史』紐璘傳）

王禕、字子充、義烏人。幼敏慧、及長、身長嶽立、屹有偉度。（王禕、字は子充、義烏の人なり。幼くして敏慧、長ずるに及び、身長嶽立、屹として偉度有り。）（『明史』忠義傳・王禕傳）

正史において、「長大」をもって長身・恰幅のよさを表現する例は、『史記』の陳平（陳丞相世家）や張蒼（張丞相列傳）を嚆矢として枚擧に暇がない。これに對し、「身長」で背の高いことを表現するのは、管見の限り、『舊五代史』の周德威（周德威傳）が初めてのようである。「長身」の出現に至っては、『宋史』を待たねばならない。

以上を綜合した上で、やや穿った見方をするならば、次のように言えるのではないか。日常生活では長身を意味する「六尺」が、少なく

とも正史という特殊な場においては、長身を意味する表現として機能しないと判断され、「長身」「身長」が代替の表現として用いられたのである、と。

この現象は、唐宋代に比して、元明代では、自分たちの一尺が古代のそれよりも長いという知識の共有される範囲が狭まっていたことを想像させる。ならば、『三國志演義』に現れる身長は、元明代の一尺、すなわち大尺で解釋されていた可能性が高いということになる。

### 五、『演義』の「小童」

前節の考察に據り、『三國志演義』が成書した當時において、そこに現れる身長表現が大尺で解釋されざるを得ない「状況」については確認できたであろう。それでは、『演義』本文中に、身長が大尺で解釋されていたという直接の證據は見出せないであろうか。

結論から言えば、『演義』本文においても、身長を大尺で解釋されていたことを示唆する記述はある。

且玄德公未見先生之時、尙且縱橫寰宇、據守城池。今見先生、人皆仰望之、雖三尺童蒙、亦謂彪虎生翼、將見漢室復興、曹氏即滅矣。(玄德公はまだ先生「竹内註、諸葛亮を指す」にお会いにならない時でさえ、天下を馳けめぐり、一方の地を占めておられた。今、先生に會われたからには、人々はみなこれを仰ぎ見るようになり、三尺の童であっても、虎に翼が生えたからには、ただちに漢室が復興し、曹氏は滅ぶであろうと言っていたものだ。)

(嘉靖本『演義』卷九第五則「諸葛亮舌戰群儒」)

松大笑曰、此書吾蜀中三尺小童亦能暗誦、何爲新書。此是戰國時無名氏所作、曹丞相盜竊以爲己能、止好瞞足下。(張松は大笑

いして言った。「この書は蜀中であれば、三尺の童であっても暗誦しているもので、なんで新書などでありましょう。これは戦國の無名氏の手になるもので、曹丞相はこれを剽竊して自らの作となし、あなたがたを欺いておられるにすぎません」と。)(嘉靖本卷十二第九則「張永年反難楊修」)

子どもの身長を「三尺」と表現するのは、やはり大尺の認定が関係していると思し、唐代以降の現象であるようである。正史に限定して見ると、『新唐書』の李泌傳や韓愈傳が最も早い例である。

當其已衰、三尺童子可制其命。(其の已に衰へたるに當らば、三尺童子、其の命を制すべし。)(『新唐書』韓愈傳)

これに對し、大尺採用以前、子どもの身長を表現する例として、ま

ず挙げべきは『論語』泰伯第八の次の條であろう。

曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人與、君子人也。(曾子曰く、以て六尺の孤を託すべく、以て百里の命を寄すべく、大節に望みて奪ふべからず、君子人か、君子人なり、と。)

但し、孔安國は「六尺の孤は幼少の君なり」と註しており、この「六尺之孤」が、前述した「三尺之童」「三尺童子」と同じ年齢層の「子ども」を指す語であるかは疑問が残る。むしろ、『論語』には遅れるものの、「五尺之童」という表現もかなり早くから用いられているところを強調すべきかも知れない。『孟子』滕文公章句上に「云う。

從許子之道、則市賈不貳。國中無僞。雖使五尺之童適市、莫之或欺。(許子の道に従はば、則ち市の賈貳ならず。國中僞無し。

五尺の童をして市に適かしむと雖も、之を欺くこと或莫し。)

また、『墨子』旗幟第六十九や『晏子春秋』内篇諫下第二にも「五

「尺童子」と見える。

「六尺之孤」や「五尺之童」が經書に見える表現である以上、大尺採用後もすべてが「三尺」に切り替わるわけではなく、例えば『舊唐書』李勣傳附李敬業傳には「六尺之孤」が、『舊唐書』褚遂良傳には「五尺童子」という表現が現れる。しかし、「三尺」をもって子どもを表現するのは、大尺採用後であるのは疑いない。ならば、『演義』全體を通覧した場合、そこに現れる身長は大尺をもって解釋されるべきものだ<sup>1)</sup>と結論づけるのが妥當であろう。

ただし、軽々な斷定には陥穽もある。例えば、近年の研究で、『演義』のテキストには部分によって文體的な相異が顯著に存することが明らかになってきている。上田望氏の研究に據れば、先に引いた「三尺童蒙」「三尺小童」の現れる嘉靖本卷九第五則及び卷十二第九則と、劉備・關羽・張飛・曹操の身長が記される卷一第一・二則とでは文體に大きな隔りがある。このような文體的相異は、書き手が持っている意識や知識の水準の相異を反映していると考えられ、端的に言えば、『演義』は複数の書き手に據って書かれている可能性が非常に高い。となると、一概に『演義』全體を通して大尺を採用していると考えることには危険が伴う。正史『三國志』などに現れる古代の「一尺」と唐代以降の「一尺」の長さに懸隔があることを認識していた書き手の存在を排除できないからである。

しかし、例えば、卷八第七則「孔明遺計救劉琦」には凌統の身長を「八尺」と記し、これは正史に典拠を持たない記述であるが、この則の文體は、「三尺童蒙」「三尺小童」の現れる嘉靖本卷九第五則及び卷十二第九則に近い。つまり、複数の書き手が存することを前提としても、その書き手の中には、疑うことなく大尺を採用し、大尺の「八

『三國志演義』における身長は如何に解釋されるべきか

尺」を身長表現として用いた者が存在していたはずである。また、『演義』全體を二箇の作品として見た場合、前節と本節で確認した現象が存する以上、『演義』の身長表現が大尺をもって解釋された可能性を、文體の問題のみをもって否定するのは強引に過ぎるのである。もう一つの問題点として、『演義』嘉靖本には「五尺小童」という表現が存することが挙げられる。卷十八第一則「難張溫秦宓論天」に云う。

溫笑曰、名稱學士、未知胸中曾學事乎。宓正色而言曰、蜀中五尺小童、尙皆就學、何況於我乎。(張溫は笑って言った。「學士と名乗っていても、學が胸中に收まっているとは限らんからな」と、秦宓は表情を正して反論した。「蜀中では五尺の童であっても、みな學に勵んでおります。どうして私が努めないはずがありませんよ、うか」と。)

ここでは三國時代の尺でもある小尺が採用されていることになる。しかし、何故、この部分に「五尺小童」が現れるかは明確に説明できない。この部分には原據があるのである。正史『三國志』蜀書・秦宓傳に云う。

溫問曰、君學乎。宓曰、五尺童子皆學、何必小人。(張)溫問ひて曰く、君 學ぶか、と。(秦)宓 曰く、五尺童子 皆な 學ぶ、何ぞ必ず小人のみならむ、と。)

前掲した『演義』の「五尺小童」の典拠がここにあることは明白であろう。出典の表現を改めなかったが故に、「五尺小童」となっているのである。そして、嘉靖本以外の版本では、確認し得た限り、二十四卷本系統の周曰校本や二十卷簡本系(黃正甫本、劉龍田本など)は「五尺小童」とするが、二十四卷本系統でも夏振宇本、李卓吾評本そ

表5 『三國志演義』 版本間における身長表現の比較

	姓名	嘉靖本		葉逢春本	余象斗本 (補湯賓尹本)	黃正甫本	周曰校本	李卓吾評本	毛宗崗本
		身長表現	卷則						
1	劉備	七尺五寸	1 1	○	○	○	○	○	八尺
2	張飛	八尺	1 1	○	○	○	○	○	○
3	關羽	九尺三寸	1 1	○	○	○	九尺五寸	九尺五寸	九尺
4	曹操	七尺	1 2	○	○	○	○	○	○
5	董卓	八尺	1 5	○	○	○	○	○	×
6	呂布	一丈	1 6	○	○	○	○	○	×
7	孫堅	八尺	1 9	○	○	○	○	○	×
8	華雄	九尺	1 9	○	○	○	○	○	○
9	關羽	九尺五寸	1 9	九尺三寸	九尺三寸	九尺三寸	○	○	九尺
10	劉表	八尺有餘	2 2	○	○	×	○	○	×
11	趙雲	八尺	2 3	○	○	×	○	○	○
12	程昱	八尺三寸	2 10	○	○	×	○	○	×
13	太史慈	七尺五寸	3 1	七尺七寸	七尺七寸	×	○	○	×
14	何曼	九尺五寸	3 4	○	○	○	○	○	×
15	許褚	八尺	3 4	○	○	○	○	○	○
16	陳武	七尺	3 10	七尺七寸	七尺七寸	×	○	○	○
17	董襲	八尺	3 10	○	○	×	○	○	○
18	文醜	八尺	6 1	缺葉	○	×	○	○	○
19	于吉	八尺	6 7	缺葉	○	○	○	○	×
20	劉備	七尺五寸	7 9	缺葉	○	○	○	○	○
21	諸葛亮	八尺	8 5	○	○	○	○	○	○
22	凌統	八尺	8 7	○	○	×	○	○	×
23	魏延	九尺	9 1	○	○	×	○	○	八尺
24	文聘	八尺	9 1	○	○	×	○	○	×
25	花關索	※	※	※	七尺	※	※	※	※
26	馬騰	八尺餘	12 4	○	○	×	○	○	八尺
27	龐德	八尺餘	12 5	○	八尺	×	○	○	×
28	張松	不滿五尺	12 9	○	○	×	○	○	○
29	彭美	八尺	13 4	缺葉	○	○	○	○	○
30	龐德	八尺	15 7	○	(×)	×	○	○	×
31	陸遜	八尺	17 6	○	(註；八尺)	×	○	○	○
32	顎煥	九尺	18 3	○	(註；九尺)	×	○	○	○
33	兀突骨	丈二	18 10	○	(丈二)	○	○	二丈	二丈
34	越吉	一丈	19 7	○	(註；一丈)	○	○	○	×
35	郝昭	九尺	20 2	也尺	(×)	×	○	○	○
36	王雙	九尺	20 3	八尺	(八尺)	×	○	○	○
37	諸葛恪	七尺六寸	20 6	○	(註；七尺六寸)	×	○	七尺	七尺
38	文鸯	八尺	22 9	缺葉	○	○	○	○	○
39	鄧艾	七尺	23 4	缺葉	七尺餘	○	○	○	×

嘉靖本の表記を基準とし、合致する場合は「○」、該当する身長表現のない場合は「×」を記入。身長表現は存するが數値が嘉靖本と合致しないときはその數値を記入。

して通行本である毛宗崗本は「三尺小童」に、二十卷繁本系統（葉逢春本、湯賓尹本など）は「三歳小童」に作る。諸版本の先後關係は措くとして、少なくとも『演義』成書の過程において、「五尺小童」という表現が、正史に原據を持つ表現であつても、必ずしも受け入れられなかつたのは確かである。

### 六、毛宗崗本の身長表現

最後に、『演義』の通行本である毛宗崗本の身長表現を確認すること、『演義』における身長表現が大尺で解釋されていたという假説を補強したい。

表5は『演義』の主要な版本について、そこに現れる身長表現を纏めたものである。毛本に至って大幅な改變が加えられていることが、一瞥して看取できよう。

無論、他の版本間についても微妙な差異はあるのだが、毛本と他の版本群との差異に比べれば微々たるものと言わざるを得ない。嘉靖本において身長表現を附された三十五名は、簡本である黃正甫本を別にすれば、毛本以外の版本群でも身長表現を伴う。しかし、毛本に至って實

に十三名が身長表現を削除されている。その中には、董卓・呂布・孫堅といった主要登場人物まで含まれ、さらに、程昱や太史慈など、正史に身長を記載されている人物についてまで身長表現が削除されているのである。

この改變が行われたのは何故であろうか。程昱や太史慈の例から推して、史書に現れないから、つまり歴史的「事實」に反するからという理由では有り得ない。となると、最も妥當な解釋は、「このような身長の間がそんな多く存在するはずがない」という、當時の日常感覺に起因する、というものではあるまいか。劉備・關羽・張飛・諸葛亮といった本當の主役クラスについては認めるにしても、むしろ主役の長身を引き立てるためにこそ、身長表現は絞り込まれ、その數を減らすことになったのであろう。

附言しておけば、毛本において、劉備は初登場の際には「身長八尺」と記され、毛本以外では「九尺五寸」あるいは「九尺三寸」であった關羽の身長は、毛本では「九尺」と改められている。これは、第四節で述べた如く、宋代以降、身長を表す際に端數を用いなくなった傾向と合致する。尤も、すでに、毛本以前からその傾向はあり、例えば現存最古の刊本とされる嘉靖本でも、正史に記載されている身長（程昱・諸葛恪・陳武など）と關羽を除けば、「〃尺」あるいは「〃尺五寸」という、「きりのいい」數字が用いられている。しかし、毛本ではその傾向が甚だしく顯著になっているわけである。これも、『演義』の身長が、『演義』成立以降の日常感覺をもとに解釋されていることを示唆する現象だと言える。

## 七、結語

冒頭に述べた如く、古來、長身は「英雄」の形象を表すべく與えられた記號であった。『三國志演義』に現れる身長表現も、無論、その範疇に收まるべきものである。

『演義』の身長表現について特筆すべきは、正史という、所謂「傳説」（第一節で挙げた堯や禹、周文王の身長などはこちらであろう）とは異なる、非常に同時代性の強い、つまり實態を記録した可能性の高いテキストを濫觴に持ち、それに密着した表現でありながら、そもそもテキストが意圖していた身長とは隔絶した印象を讀者に與える點にある。極端に言えば、自分たちに繋がる等身大の世界を描いたはずの正史を淵源としながら、『演義』が描き出すのは、等身大とはい難い、巨人たちが闊歩する世界となっているのである。

そして、ここまでの考察が正鵠を射ているならば、當然、次のような結論に辿り着く。少なくとも『演義』の主たる讀者層を形成している人々にとって、南北朝以前、すなわち大尺採用以前の正史やそれに類する史書もまた、そのように讀まれざるを得なかったのではないか。そして、そのような讀まれ方をされていたのであれば、彼らにとっての史書と、現代の我々が意識する史書とは、その記述が意味する所に懸隔があったと考えられる。ならば、本稿での考察を端緒に、「歴史がどう讀まれてきたか」について考察を擴げてゆくことも可能であろう。これを今後の課題として、擱筆したい。（了）

注

- (1) 『三國志演義』嘉靖本卷一第一則。
- (2) ただし、『史記』項羽本紀の記録などとは異なり、禹や殷湯王、周文王の身長について、彼らが生きていた時代の記録である可能性は低く、傳承の類なのは疑いない。しかも、その傳承の發生自體、相當後代になってからである可能性がある。ここに挙げた三者の身長について、經書あるいは『史記』などには記述はなく、『初學記』が引くのは、西晉・皇甫謐撰の『帝王世紀』である。
- (3) 漢魏より隋に至る度量衡の變遷については、『隋書』律曆志上に詳しく。
- (4) 『三國志』の撰者である陳壽は、西晉の元康七年（二九七）に卒したと、『晉書』本傳に云う。
- (5) 『三國志演義』については、嘉靖壬午（元年、一五二二）の『三國志通俗演義引』を附する所謂「嘉靖本」が、今のところ、現存最古のものとされる。なお、本稿における『演義』の版本についての言及は、基本的に中川論『三國志演義』版本の研究』（汲古書院、一九九八年）の考察に従った。
- (6) 正史は「臺灣中央研究院漢籍電子文獻瀚典全文檢索系統」(<http://www.sinica.edu.tw/~tdbproj/handy/>)を、『平話』は「階堂善弘氏主催「電氣漢文箱」の「全相平話二種畫像・テキストデータ」(<http://www2.jpcku.kansai-u.ac.jp/~nikaido/pinghua.html>)を、『演義』は周文業主編『三國演義電子資料庫』（北京國學時代文化傳播有限公司、二〇〇三年）を電子テキストとして用い、それぞれ底本により確認した。
- (7) 本稿では、『水滸傳』の身長表現について言及することがほとんどできなかったが、『三國志演義』とは別個の問題を抱えている。稿を改めて言及してみたい。
- (8) 中國文學における身體表現については、高橋明郎「中國文學における身體描寫・序説」(『香川大學教育學部研究報告 第一部』第九十三號、一九九五年一月)や小川陽一『日用類書による明清小説の研究』(研文出版、一九九五年)「第三篇 明代小説と占卜」の「第二章 明代小説における相法——三國志演義と金瓶梅詞話を中心に——」に論考がある。
- (9) 表一所掲『中國古代度量衡圖集』尺度の部、圖69およびその解説参照。
- (10) 黃庭堅「奉送中攝東曹獄掾」詩、及び晁説之「題鄆州牡丹」詩。
- (11) 蘇軾「送劉道原歸觀南康」詩。
- (12) 古くは『莊子』雜篇・盜跖に、「孔子曰、丘聞之、凡天下有三德。生而長大、美好無雙、少長貴賤、見而皆説之、此上德也」と見え、(ここではやや皮肉な使われ方をしているとは言え)身體の長大なるを美とする價值觀の存在が窺われる。しかし、正史における身長表現は『三國志』以降に急激な増加を見せており、直接には後漢の許劭が行っていた「月旦評」(『後漢書』許劭傳)の如き、後漢における人物鑑定流行に端を発している可能性を指摘できる。
- (13) 例えば『晉書』劉曜載記では劉曜の容貌を「身長九尺三寸、垂手過膝、生而眉白、目有赤光、鬚髯不過百餘根、而皆長五尺」と描寫する。これは現實の記録というより、後に前趙(漢)の皇帝となる劉曜が、そもそも常人とは異なる容貌を持ち、帝位に就くに相應しい人物であったと喧傳することが目的の記述であろう。
- (14) 『新唐書』選舉志下に「凡擇人之法有四。一曰身、體貌豐偉。二曰言、言辭辯正。三曰書、楷法適美。四曰判、文理優長。」と見える。
- (15) 篇名のみを列挙する。張説「唐玉泉寺大通禪師碑銘并序」(『全唐文』卷二百三十一)、李華「潤州鶴林寺故徑山大師碑銘」(同卷三百二十一)、李吉甫「杭州徑山寺大覺禪師碑銘并序」(同卷五百十二)、王顔「追樹十八代祖晉司空太原王公神道碑銘」(同卷五百四十五)、費冠卿「九華山化成寺記」(同卷六百九十四)、李渤「梁茅山貞白先生傳」(同卷七百十二)、李宏慶「大慈恩寺大律師基公塔銘并序」(同卷七百六十六)、馬支「釋大方

廣佛新華嚴經論主李長者事述」(同卷八百十六)。なお、説經という形で口承文藝と深い関わりをもっていたであろう佛教に關係する文書に身長表現が比較的多く現れるのは興味深い現象であるが、本稿ではこれ以上立ち入らない。

(16) 王瓘「廣黃帝本行記」(『全唐文』卷八百十八)、李嶠「攀龍臺碑」(同卷二百四十九)。

(17) 韓賞「鄭康成祠碑」(『全唐文』卷三百三十)、尙馳「諸葛武侯廟碑銘」(同卷九百五十六)、朱敬則「陳武帝論」(同卷百七十一)。

(18) 『舊五代史』以降では、管見の限り、宋の虞允文を「六尺四寸」(『宋史』虞允文傳)とし、明の徐輝祖を「八尺五寸」(『明史』徐達傳附徐輝祖傳)とする二例しか見出せない。

(19) 『朴通事諺解』卷下に「大明殿前月臺上、四角頭立地的四箇將軍。咳。那身材。身長六尺、腰闊三圍抱不匝、……」という記述がある。

(20) 上田望「『三國演義』の言葉と文體」(『金澤大學文學部論集 言語・文學篇』第二十五號、二〇〇五年三月)参照。

(21) 註(20)所掲上田論文参照。

(22) 『三國志演義』の諸版本については、『三國志演義古版叢刊五種』(中華全國圖書館文獻縮微復制中心、一九九五年)及び『三國志演義古版叢刊續輯』(同、二〇〇五年)所収のものに據った。

(23) 蜀漢に屬する人物については、毛本が身長表現を削除する例はない。唯一、魏延のみ他の版本では「九尺」であるのに對し、毛本は「八尺」に作る。

(24) ただし、毛本三十五回では、劉備の身長を「七尺五寸」に作る。

※本稿は、日本中國學會第五十八回大會(二〇〇六年十月八日、於大東文化大學)における口頭發表及びそれに伴う質疑應答をもとに執筆した。その際賜った貴重な教示について、咀嚼できなかったものも多い。寛恕

『三國志演義』における身長は如何に解釋されるべきか

を請いたい。また、發表後、高橋明郎氏より註(8)所掲論文を惠與され、啓發されること甚だ大であった。記して謝意を表したい。